

事故予防の矛盾

「事故は起こってからではおそい」というが起こらないと対策が進まないという現実が存在している。設備設置などは事故が起こってから今後の対策予算として計上されてくる。「事故が起こりうる可能性」などの予算は「前例をもたない事案」として大きなリスクと大きな決断が必要とされ、承認されにくいという皮肉がある。昨今多発する生活道路の悲惨な事故がテレビ報道されている。予防のための予算は人命を守る一つの手段である。「事故は起こってからではおそい」「事故が起こりうる可能性」は「事故が起こる」という判断をしなければならない。事故予防に矛盾は必要ない。取り返しのつかない事がおこらないような決断が必要とされることを再確認する時期がきているようにおもう。

ゲートキーパーとは

本来「門番」という意味ですが、もっとも身近で悩みや話しを聞いて、必要な支援につなげ見守ることです。いわゆる生きることを支援できればと考えている人と解釈しています。

うさぎとかめ

「うさぎ」と「かめ」はそれぞれの特徴を活かして生きている。

お互いがその特徴を否定すればお互いが活かしきれずに生きていかなければならない。

目的のためにそれぞれの特徴を活かして前にだけは進んでほしい。

政治の世界も目的のために歩んでほしいとおもうのは私だけでしょうか。



森ひさゆき後援会

会長 藤木厚一

事務所 和泉市鍛冶屋町344-2

TEL 0725-55-3799

FAX 0725-55-4288

Mail

info@morihisayuki.com

和泉を守る

ゲートキーパー宣言

森ひさゆき



プロフィール

和泉市浦田町に生まれ現在鍛冶屋町在住、55歳、妻と子供二人、愛犬チビ・ラメの二匹、有限会社テクノ工業取締役、少林寺拳法和泉南道院長(大拳士6段)、前衛書道家、小学校PTA会長、大阪芸術大学グループ塙本学院校友会常任理事、元大阪芸術大学・大阪商業大学堺高等学校・阪南大学高等学校非常勤講師、1995年堺青年会議所副理事長、特に関心のあることは「人が生きる」ということ、自分の経験を活かし生き抜くためのゲートキーパーとしての役割を果たしたいとおもっている。人生を大いに語り合いたい。

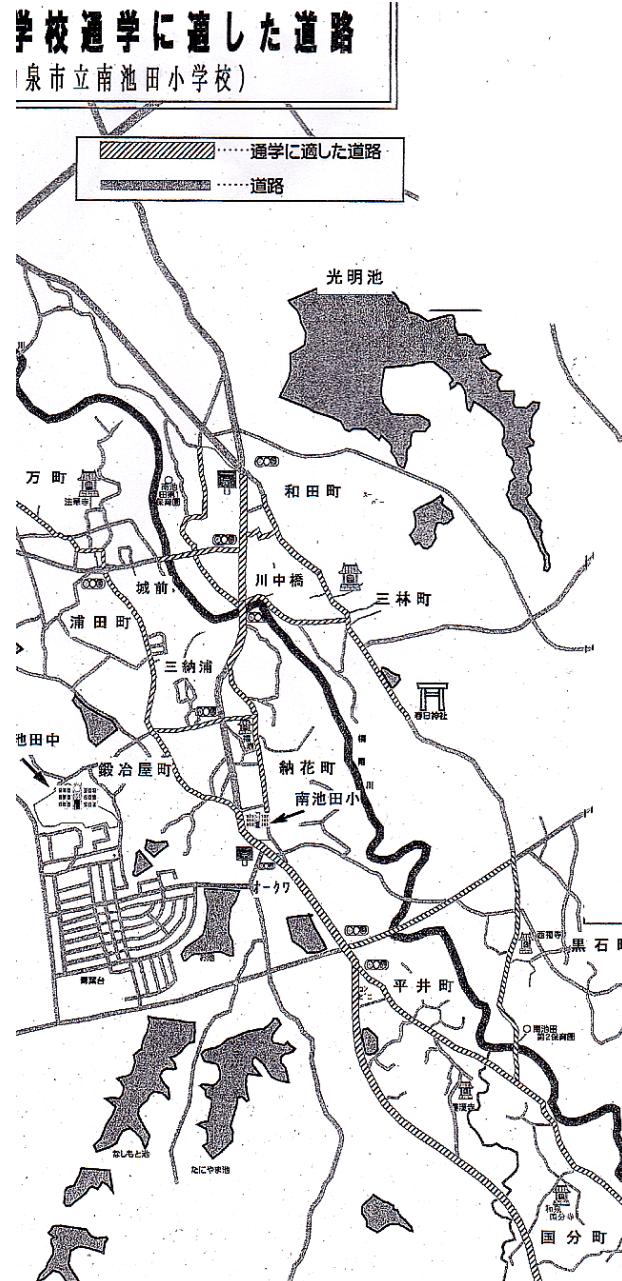
安心できるまちづくり

自分たちのまちは自分たちで守る。それが唯一の条件である。

ゾーン30を考える

「あぶない!」と大きな声でさけんだ。学校の通学路のことである。グリーンベルトという歩行者専用のラインが引かれているところであった。児童はきっとライン内を歩行していたが車が猛スピードで駆け抜けていった。「ゾーン30の推進」という最高速度30km/h規制を実施することができれば対策となる。(自動車と歩行者の衝突事故は、走行速度が30km/hを超えると致命傷を負う確率が急激に高まるところから設定されている。)またこの区間での速度オーバーをする車両はときとして不審車両とみなされ防犯対策にも関係てくる。さて「ゾーン30区域の選定」はどうなるか、管轄署の采配を待つかない。その前に強い住民要望が必要不可欠とされる。安心できるまちづくりの最大のポイントは強い住民要望が整えられるかどうかが重要となってくる。自分たちのまちは自分たちが守る。それが唯一の条件である。

現在小学校では安全のための適切な通学路を指定することが困難なため「通学に適した道」を指定して通学指導しています。(下記学校配布資料部分コピー)



教育現場

教育現場にも格差があるという。学校の設備に不備があったり、現場運営上支障をきたすようなことが存在する。都市計画などによる人口推移の問題が教育環境に変化をもたらしている。日本の未来を担う子供たちが成長過程で同じ教育環境をあたえられずにいることは地域のおおきな損出になる。和泉市立という絶対安全圏だとおもっていたことになんら疑問をもつことはなかった。児童に配るプリント1枚も予算でまかなえないことが存在すると聞く。予算があっての運営は企業ではあたりまえのことではあるが、教育現場においての出来事には驚かされる。「プリント用紙1枚の節約」が教育環境の維持となり得るかが疑問である。無駄か節約かは検討を要するところではあるが、教育現場が費用の捻出に四苦八苦している姿がどこまで正当化できるか、大きな不安材料として残る。

子供たちに与えられる教育環境を整備し、子供たちの夢や希望に向かい合い、応援出来る私たち地域の大人的役割をいま真剣に考えるときが来ているようにおもう。